

教育功績等表彰者の座談会記録

国立大学法人佐賀大学教育功績等表彰規程及び国立大学法人佐賀大学教育功績表彰者推薦基準が制定され、これらに基づき、規程第2条第1項第1号による表彰者1名、規程第2条第1項第2号による表彰者5名が選出された。平成21年7月31日には、学長から学長賞として表彰状の授与式があった。その後、大学教育委員会と高等教育開発センターの共催により、表彰者の座談会が9月1日に開催されている。以下に、座談会の記録を記す。

氏名	理由	基準	推薦部局
1号表彰			
濱内 繁義	キャリア教育の創設に対する貢献	推薦基準 第2条第3号	経済学部
2号表彰			
酒見 隆信	平成20年度に医学部で実施した卒前アンケートにおいて、ベストティーチャーに選出され、医学教育分野において、熱意が伝わったと学生から高い評価を得た。	推薦基準 第3条第1号	医学部
船久保 公一	早い段階から e-learning による学修支援を実施し、その教育効果を実証した。また、LMS による e-learning の効果を学内のフォーラムで報告し、参加者等に広く紹介した。	推薦基準 第3条第6号	理工学部
谷本 静史	学生参加型授業を積極的に展開した。また、複数の教員が行う授業においても、教員間の綿密な打合せを行うことを主唱し、教育目的に合致する内容となる講義を実施した。	推薦基準 第3条第1号	農学部
金 銀姫	平成20年度の卒業・修了予定者対象のアンケートにおいて、「授業内容がよかった」、「授業方法が良かった」、「熱意が伝わった」等、学生からの高い評価を得た。	推薦基準 第3条第1号	教養教育 運営機構
浅岡 高子	研究生対象の大学院入学前の予備教育としての日本語研修コースにおいて、留学生を指導し、大学院生の入学増に貢献した。また、米国のバンフィック大学との大学間交流協定に基づく語学研修への日本人学生の派遣及びハワイ大学とのツィニングプログラムの推進に尽力した。	推薦基準 第3条第6号	留学生 センター



表彰状の授与式にて

【座談会記録】

大石 それでは、2009年度佐賀大学の教育功績等表彰対象者の座談会を開催します。

高等教育開発センター長の大石と申します。本日は進行役を務めさせていただきますので、よろしく願いいたします。

この座談会の経緯と趣旨を簡単に説明させていただきます。

本学では昨年度に教育功績等表彰という規程が制定されまして、それは教育活動の活性化を目的として本学の教育に功績のあった教員を表彰することになっています。そこで、座談会を開催して表彰された先生方の教育の実践等に関するお話を伺って、それを学内外に広報することで教育の活性化につなげていこうという趣旨です。

それでは、きょうの座談会の出席者の方を私の方から簡単に説明させていただきます。

まず、表彰の方は、1号表彰が濱内先生、2号表彰が酒見先生、船久保先生、谷本先生、金先生、浅岡先生と計6名おられます。座談会は酒見先生と船久保先生と浅岡先生の3名の先生方に参加いただいております。

それでは、先生方の受賞理由に関して各先生方からご説明いただき自己紹介をかねてお願いしたいと思います。

酒見 医学部の酒見です。私が選ばれたというのは、医学部では杉森賞と言うシステムがあり、卒業時に学生投票でベストチューター賞というのを選んでいきます。卒業時に入学時からの授業、実習全科目の科目評価と共に学生が自分が良いと思う先生、いい影響を受けた先生とか、そういう先生を看護学科から1名、医学科から基礎の部分と臨床部門それぞれ1名選びます。基礎部門で今回私が選ばれた結果だろうと思っています。

船久保 理工学部を担当です。実は、私は2年前と3年前はこれを選ぶ方の立場だったのですけれども、恐らく理工学部はFD委員会

で選んでいます。各学科が、既に理工ではJABEEとかやっている学科があって、優秀教員を選ぶ制度が既に幾つかの学科であったのですね。それで学科の基準を明確にさせていただいて、それで選んでくださいという指定をして、それで各学科から集まってきたのを見て、今年はこの先生にしましょうということを決めています。

内容は、私は平成18、19年度に委員長のときにFD企画というか、講演会を開くにあたって、どうせやるなら何か役に立つことをやろうと思って、それと私が前からやってみたかったというのでeラーニングを使って学生に問題を出すことを行いました。最近の学生は演習問題を出しても自分で解いてきません。それを小テストとかでやるのですけれども、それを毎回授業時間にやっていると、それに時間を食われて授業が進まないのですね。そうなるので、できれば授業時間外の自習時間を有効活用するために実施しました。私が受け持っている科目が実は2年生の専門科目で、そんなにたくさん本があるような科目ではなく、専門性の高い科目なので、問題は自分でつくるしかなかった。できるだけ楽をしたいというのと、学生が解いてちゃんとためになるようなものをつくりたいというので、平成18年の年度末にeラーニングスタジオの方に行って、LMSというのが学習管理システム、ラーニング・マネジメント・システムのことなのですけれども、その中で問題が出せることを知りました。しかもその後ちょっとシステムを少し修正していただいたりして、私たちが論文を書くときに使うTeXという言語があるのですけれども、それを使って式が書けるようにしていただいて、ちょうど年度末に講習会を企画しました。そこで20人から30人ぐらいの先生が参加されるよう2回に分けて開いたのですけれども、自分もそこに参加してLMSを使って学生に自習用の問題を出題する。19年に実際運用して、その成果を昨年度開かれたFD・SDフォーラムでも紹介したのですけれども、それ以外にも、うちの学科とか数学科でも方

法を紹介してというのが恐らくこの表彰の理由だと思います。

浅岡 留学生センターの浅岡でございます。

私の受賞のプロセスは柳田センター長からの推薦ということです。留学生センターは教員7名でして、優秀な教員を選ぶとか、そういうようなシステムティックなものはありません。それで私は本年度いっぱい定年になりますので、柳田先生がご推薦くださったのではないかと私は思っております。それで私なりにやってきたことを評価くださったのだらうと思っています。

ここに書いてありますように、私は留学生センターで研究生の日本語というものを担当してきました。私は、実は佐賀大学へ来まして8年目なのですが、それ以前はオーストラリアで長く日本語教育の活動をやっておりました。それで佐賀大学に採用されて、最初のうちは留学生の日本語教育ということを中心にやっておりました。今でもそれをやってはいるのですが、それからしばらく時間がたちまして、だんだん感じてきたことは、日本人学生の国際的な視野ということで、日本人学生にもっと国際的な視野を広げてほしいというように考えるようになりました。それで、もちろん私の業務の一つには日本人学生への留学相談というのがありまして、留学をしたい、どうしたらいいかということで私の方に相談に来る学生がおりまして、そういう相談に当たっておりますけれども、私は、もっと広く多くの学生が国際的な経験というものをしてほしいなのを常に思うようになりました。

授業の中では、できるだけ取り入れるようにしてきたことは、留学生というのも佐賀大学にいる国際的な要素を持った人たちということですので、日本人学生を留学生の日本語のクラスに来てもらって、そこでその人たちと話し合う機会をつくったり、それから茶道部の学生さんたちに茶道の時間をつくってもらって、そこに留学生が行ってもらって、そこでお茶の手前を見せてもらったり、お茶

の入れ方を学ぶことはもちろんなのですが、そこから日本人学生と留学生との交流が進んでいくということも進むようになりました。

それから、国際シンポジウムというものを私の発案で作りまして、日本人学生と留学生が、合宿型のシンポジウムなのですが、久住とかこの近辺の施設に1泊2日で行きまして、そこでいろいろなテーマについて学生と留学生たちが一緒になって話し合うというようなこともやってまいりました。そして成果が、みんなそういうところに参加すると、非常によかった、そして留学生というものを、今まで佐賀大にも留学生という人たちがいたけれども、話したいと思っていたけれども、そういうチャンスがなかったとかいう学生たちが実際に留学生とお話しするようなことができるようになったと思っております。

それから佐賀大学と様々な大学との交換協定を始めました。

私が今このことに力を注いで研究とかいろいろやってまいりましたのは、日本人学生の海外留学ということの推進ですね、それをさせていきたいということでやってまいりました。佐賀大学で日本人学生の海外留学ということを考えると、いろいろな学部が不備な点がたくさんある。システムだとか情報の部分が整備されておきませんので、そういうことを私がこれからやりたいと思っておりますけれども、志半ばで終わるという面で残念なところがありますけれども、でも、今回こういう私の努力が評価されうれしく思っております。

大石 今、表彰対象者の3名の先生方に自己紹介を含めて受賞理由に関する説明をしていただきましたが、開催側の先生方から何かご質問とかありますでしょうか。

酒見 さっきもちょっとお聞きしたのですが、1泊2日の、交流会ですね、シンポジウムですか、参加者は何名ぐらいでしょうか。

浅岡 予算とかありますので……。

酒見 予算もちょっとお聞きしたいので。

浅岡 留学生20名、日本人学生20名ということで募集をするのですが、留学生は20名すぐ集まります。ウェイティングリストができます。日本人学生です、いつも問題なのは、一生懸命集めて10人ぐらい。

大石 少ない理由とか何か。

浅岡 少ない理由は、ですから、余り興味がないとか。

酒見 予算的には大学から幾らか出るのですか。

浅岡 ありますが、個人負担もします。2,000～3,000円ぐらいですかね。

田代 浅岡先生が強調されていました日本人学生が外国に行ったりして見聞を広めることは、非常に大事なことだと思いますし、佐賀大学もそういう機会を先生初めいろいろつくっていると思うのですが、日本人の学生がなかなか行こうとしない。そして特に最近では男性が行こうとしない。何かそういう企画があると女性が参加しますよね。最近の企画でもそうでしたけれども、11～12人行ったうちに男性は1人だけです。どうも男性が最近では引込み思案なのか、あるいは就職等が非常に激戦だから、そういうのに頭が行ってしまっているのか、ともかく行きたがらないところがある。そこをどう改善するか。

行きたがらないのは必ずしも学生だけじゃなくて若い先生たちも行きたがらないのかもしれないという感じもしてきました。昔は、といますか、20年以上前は佐賀大学の先生が外国に出張すると報告会というのをしていたのです。そうすると先生たちや大学院生なんかも集まって、例えばドイツに留学

をしたとか、オランダに留学したとか、向こうで研究生活を送ったとか、いろいろそういう話を一生懸命聞いたりしていました。

ところが、それがいつの間にか国外へ出るのが当たり前になったということもあるのか、帰国報告会等を企画しても聞きに来なくなって、外国に対する興味が先生も学生も無くなって来たようです。国外へ出るのが普通のものになったと考えることもできるので、普通のものになったのならば学生も普通に外国に出て行っていいと思うのです。しかし、なかなか出ていきませんが、だから、普通になったということ以外に何かやっぱり問題があるのかなという気がします。何かそういうところを、先生から提案をいただければありがたいと思います。

大石 語学の障害とかはないのですか。余り関係ないのでしょうか。

浅岡 私が調査した範囲では英語ができないから海外に行かないというようなのも結構ありました。やっぱり海外に行くというのは大変なことなのですね。大変というか、つらいというか。日本では日常余り問題がなく、そこから出ていけなくちゃいけないということで、どうしてそういう大変な思いをしなくちゃいけないのかというふうなことです。でも、出ていった人たちは一番身につけたこと、もちろん語学ができるようになったとかありますけど、一番の成果というのは自分自身に対する自信なのですね。それは特に正規留学をして、交換留学で向こうの授業をとって単位を取ってきたなんていうとすごく励みになりますね。死ぬほど勉強したという、自分がどういう人間なのか、どういふことができ、どういふことができないのか、留学経験によって分かったというのが成果です。

そういうのに興味のない人たちもそういうふうに向かせるには、私が考える一つは、とにかく授業の一環にする。短期間でいいのです、最初は。とにかく海外に行くのもいい

し、異文化接触をするというのを授業の範囲の中に認める、授業の一環にするとか、いろいろな留学プログラムも語学研修だけでなく、もっとインターンシップだとか、それから開発の地域へ行って井戸を掘ったりだとかいろいろボランティアとか、そういうようなものでいいのですけれども、そういうようなものを帰ってきたら、それを大学側が認めるという、そういうのもあれば、良いと思います。

大石 学士課程教育でも文化理解というものもありますし、今、浅岡先生がおっしゃったように授業の中で恐らく広い意味で教養的な科目というものが必要なのかなと思います。やっぱり大学側がというか、教員側がということなのですけれども、ある程度背中を押してやるというか、行こうかなと思うけれども、帰ってきてそれを経験すればいいということはわかると思うのですけれども、それを踏み出すことがなかなか多くの学生はできないのかもしれないから、強制ではないけれども、少しやはり押してやらないと、そういう教員側の姿勢とか大学側の姿勢が必要なのかなということですかね。

浅岡 それは確かにあると思います。本当に身近にいる先生が勧めたり、背中を押してあげる、それはすごく大切で先生方のご協力が必要ですね。

田代 先生がおっしゃるように、学生の外国に出掛けることは大変なことだという意識、意識の問題なのか、現実的に客観的に見てそうなのか、どちらでしょう。

浅岡 行く前に大変だというふうに思っているかどうかですか。言葉がわからないから、わからない学生が大変だと思うのだろうと思うのです。やっぱり行ってみても大変だということがわかってくると思うのですけれども、それとやっぱりいろんなことに対する興味ということが何か少ない。

田代 そちらの方が一番大きな要因ですかね。

酒見 今のままでいいのだという学生が多いですね。教育的にどうするのが良いかという、ロールモデルを与えるという、ある一つのモデルを示してやることも一つの方法ではないかなと私は思います。例えば海外に関しても、うちの卒業生の話しをすることにより底上げができるかもしれない。極端に言えば、それでモチベーションが上がる人が出てくる可能性がある。このようにモデルを示してやるが必要じゃないかなと。

浅岡 留学生センターでは留学報告会というのを毎年開催しております、留学した学生さんたちに来てもらって興味のある学生に経験を話してもらうことをやっておりますけれども……。

酒見 僕はそれでは来ないと思います。もう少し違う視点で。例えばここを卒業して放浪の旅をずっと続けている人とか。

田代 そういう学生は実際いますから。南米を自転車で……。

酒見 その先輩の「異文化に触れたらこんないい経験が得られた。」などの話を聞いたらちょっと行ってみようかと思う学生が何人かいるかもしれない。もう一つは、海外の姉妹校での実習に単位を認定するシステムの構築も必要でしょう。医学部ではハワイで1カ月間実習を行ったことによって単位を認定しています。他学部でも同じシステムがあれば卒業時に認定書を発行すれば就職時に非常に役に立つでしょうから。

大石 大学側が、学生を誘うような何か仕掛けをいろいろつくっていかないと……。

酒見 なかなか学生は。今で十分だから、別にわざわざしなくてもいいのですよね。

田代 本当は十分ではないのじゃないですか。先生がさっきおっしゃったけれども、やはり自分がもっと成長していくためには今のままに任せてとかいうのでは十分ではないのでしょうか。

酒見 僕らは十分ではないと思っているからいろいろするけれども、学生自身としては今の方が楽しいわけですよ。楽しいというか、余り勉強しなくて、そこら辺で遊んでクラブやって、終わってみんなで酒を飲んでということで、今のままでいいわけですよ。しかし年をとってきたら、あのままでよかったのかなとは思いますが、その時はそれでいいわけですよ。それだけよりももっと、もうちょっと何かあるよということに刺激してやるのが何かという。

大石 大学の役割ですね。

酒見 大学の役割。どうしていくのかという方法論のところではいろんな方法があると思うのです。簡単だったら、だれも。なかなかそれが難しい。

渡 方法論でいえば船久保先生が LMS などをご活用ですけれども、先生の講演を伺いまして、本年度、数学の線形代数に取り入れました。合格率が上昇しました。復習に取り入れて非常に効果があったのですが、これを予習に使うことはできますでしょうか。

船久保 おもに線形代数とか解析といった一回習ったことの復習とか、追いついていない人とかのために使っています。ただ、専門科目とかだと私だったら1週間ぐらい先に出しておく、やってくる者はやってきます。みんなそれに期待するが。

大石 単位制度の場合には前もって予習させておいて、そして授業を行うというのが本当の単位制度の考え方ですよ。今、多分渡先生はそういうふうには何か LMS は使えない

かと。

船久保 だから一応、今のセンターでも考えているのですけれども、ゴーイング・シラバスで毎週毎週、例えば今週ここをやったから次はこういうことをやるということを学生には指示できるのです。だから次はこれをやるから、これをやるためには若干こういう知識とかこういう計算ができなくちゃ困るのだから、こういう問題を解きなさいとできるのです。それは予習というよりは準備ですね。

渡 準備をシラバスで指示するというやり方ですね。

船久保 LMS の中に毎週毎週書き込むことができるので、そこにここを次に使うから、ちょっと苦手な人はこの問題を解きなさいと出来る。

大石 そういうふうに理由を書くと学生もやるかもしれない。ただ単にこれをやれ、これをやれと……

船久保 それはやらないです。

酒見 学生というのはテストに弱い。単位を取るためには最後の試験だけじゃなくて中間試験とか基礎的な試験とか、そうしないと勉強しないですよ。誠に残念なことなんですけど。

大石 本当はそれが目的で一番重要だというふうに思われているのは困るのですよね。そのために勉強するのではないのだけども。

酒見 学生はどういうことで動くかという、テストで動くところが大きいのですよね。

大石 外国人の学生も受けられると思うのですけれども、最近というか、これまでの日

本人の学生と留学生とか学生の何か差異とか、つまり授業の受け方とか、そういうのは特に感じられることはありますか。

浅岡 日本人学生は、私は日本語教育というのをやっています 30 人ぐらいの学生がいるのですけれども、私はもっとインタラクティブといいますか、学生からの質問が来るような、そういう授業をしたいのですけれども、なかなか学生からはこういうことについてどう思いますかと言っても反応がない。こういうことについて話してくださいと言っても、ディスカッションしてくださいと言ってもなかなか来ない。

それと欧米の学生たちは、日本語学習に関しましては語学学習に対する態度というのがちょっとやっぱり違うと思うのですね。日本人学生は、英語というのは知識、そういう教育を受けてきたからですね、動詞の活用を覚えたりということでは英語を知っているけれども、使えない。だけれども、私はオーストラリアの経験でも欧米系の学生を見ると、とにかく習ったことを使えなければ意味がないとか、おもしろくないとか、ですから、どんどん話しますし。いろんな議論するタイプの授業が多いと思いますし。教育制度が子どものころから教育の仕方がそういう、オーストラリアとかアメリカでもそうだと思いますけれども、そういうふうなので、どっちがいいとか悪いとかではなくて、違いますね。やっぱり学問が、今の学問の仕組み西洋の実証主義的な学問の仕方、そういう教育のされ方ですね。意見を言うのも理論的にいろんな側面から見て議論するとか。日本人学生はそこが弱いですね。

大石 今まで 3 名の先生方の受賞理由に関連していろいろお聞きしました。一般的な教育、もちろん教育改善ということでは、大学は今求められているわけですが、よく言われているのは、多くの人がかほとんど 9 割近くが今、高等教育を受けた上で社会に出るということ。例えば、これが戦

後すぐだと逆で、高等教育を受けて社会に出る人というのは人口の 1 割。それはもう逆転しています。ほとんどの人が高等教育を受けるという状況になっていますし、それから、少子化がさらに別の理由として挙がっています。そういうことから、佐賀大学に入る学生も学力のレベルとか学習の意欲とか、いろいろなものが非常に幅広くて、全体的にレベルが下がっているのかもしれない。

授業を改善する上でどうするかということがよく議論されていて、大学教育委員会とか高等教育開発センターでも、いろいろな方法とかを提案したり、検討しているわけですが、授業改善には二つの考え方があると思うのです。要は授業の内容と方法に大別できると思うのですけれども、さっき言いましたように、私たちが受け持っている今の学生は非常に幅が広い、学力も意欲も低くなっています。そして平均的な領域とか判断のためにこれまでの私たちが課していた授業内容とか、そういうものが今のままでいいのか、その辺のことも私は少し気になるのですけれども、そういうことに対して先生方はどのようにお考えかなど。

酒見 授業の内容ですか。

大石 授業の内容と方法とがあると思うのですけれども、例えば内容はどのような内容を課して達成させるかということと、それをよくしていくという方法がありますね。それは多分、教員同士、専門家同士で、この授業の内容でいいかどうか、そういうことを検討する必要がありますと思うのです。

それから授業の方法の方は、教員というよりは実際に受けている学生の方が、今、授業評価アンケートをやっていますけれども、方法論については、それぞれの教員がとっている方法でいいのか、要は授業を改善していく上では内容をどうするかということと方法をどうするかということの二面があると思うのです。内容に関しては、例えば今の学生にとってはちょっと無理なんじゃないか

というようなこともあるかと思うのですが、この点に対してどのようにお考えでしょうか。

酒見 これは非常に難しい問題で、例えば、ある科目の重要性が以前と比べて、どうなのかということをしかりはかる必要があると思うのです。今求められている、今必要とされている科目、それは昔なかった。それを新たに入り込ませようとした場合に従来の科目を削るということになります。科目の削除、追加などそういうことをするシステムというのが、十分には機能していない。

大石 それは多分、組織的にやらないと……。

酒見 科目を減らすということは、その先生の必要性が低くなるということだから。極端に言えば、それは非常に難しいところがあります。

大石 それは例えば科目と先生が一对一だからですね。本来は科目があつてというか、教育する内容があつて、そして、そのために本来はその適した人を雇用しているはずだけれども、現実には必ずしもそうっていない。

酒見 ということで、ちょっと難しいところがありますね。

大石 医学部の場合は、教育目的がはっきりしていますよね。要は医師国家試験に合格させることが第一の目的ですよ。そうすると、例えば内容を変えるといってもなかなかできないとか。

酒見 そう。だから基本的な内容というか、専門のところは絶対変えることはできない。ところが一般教養で変えなければいけない内容が出てきた。昔は医療者での人と人とのコミュニケーションの必要性なんてだれも言っていなかった。最近では、そのコミュニケーションをどういうふうにすればいいか

ということが学問上、教育上必要になってきている。ところが、そういう科目が必要ということではあつても、どこかを削るということになるとやはり難しい。一般教養と医学の整合性をどう持たせていくのか。どういう医療者になるにしても、この科目の必要性の程度を明確にすることが大切ですね。

大石 内容を変えられないとすると、そして、例えば学力が下がっているような学生となると、方法は何かしない。

酒見 だから到達の部分はどこにするかによると思うのですね。教えている先生からすると、到達目標はここまでないといけないということになるのでしょうけれども、そこまでは無理ですよと、もうちょっと下げてもらえますか、ということではしか対応できないと思いますね。

大石 昔は医学部の場合は国家試験というのがあった。

酒見 どんないい教育をしようが、国家試験が悪かったらだめなのですよ。そこがちょっとほかの学部と違うところ。一番いいのは国家試験なんか卒業したら免許を与えてくれば一番いいと思うのですけれども。教員免許みたいな仕組みなら一番いいなと思っているのですけどね。

田代 古いものは整理をして、新しいのを教える。それをだれかがしなくちゃいけない。一つは科目を担当している先生が整理をすることですが、それは普段先生方がある程度されているんじゃないかと思います。ただ、各学部の学生に何を教えるかという全体像は、先生たちみんな考えていかなければならないでしょう。医学部には全体像を考えていく仕組みはないのですか。

酒見 教育委員会というのがございまして、そこでやっています。それはもちろんやって

いますけれども、どうしても総論は大体いい。総論は大体いいから、あとは各論的にどうしていくかということになる。

大石 教育委員会というのは、医学部全体として設置しているものですね。そうすると大きいかなとも思います。

酒見 その中にまた基礎の部会というのがございまして……。

大石 そういうところで十分議論されているのですね。

酒見 もちろん議論はもうやっています。だから今カリキュラムを色々変えているのです。極端に言いますと、臨床に比重が非常に移りすぎた結果、基礎医学とかの時間数がぐっと減ってきています。基礎の先生から文句が出ています。そのしわ寄せが一般教育に回って、数を減らしているのも更に文句が出ています。そこはアンバランスがありますが、カリキュラム改革のシステム自体は機能していると思います。教育委員会では、また今後5年間とか6年間は教育をどうするのかという医学部全体でお話し合いがあります。

大石 船久保先生のところはいかがですか。

船久保 内容は私たちの方は物理とか、数学もそうなのですが、教える内容そのものは数十年の間でそんなに変わっていないのですね。体系がガッチリしていて。多分変わってくるのは早くても4年生で、修士論文とかだと、私もここにきて20年になりますが、毎年のテーマは変えていくので、そういうところまでいくと新しいものが入ってくるのですけれども、学部レベルの教育はそんなに変わらないのですよ。だから、内容が大体カチッと体系立ったものがあって、むしろそれをちゃんと勉強させるために、例えば1年生の授業にこんなものを入れようとか、そういう工夫はしています。

ただ、学科の中で、この間も、1年生向けに概要的な物理全体を見渡すような基礎科目を開講したりとか。あとは大学入門科目Ⅱというのをやっています。我々が大学入門科目Ⅰと言っているのは、前期に新生を集めてパソコンの使い方、図書館の使い方を教えたりとか、いろんなことをやらせて、後期には教員1人が学生を大体3人か4人担当する担任制で、後期の間ゼミをやっているのですね。少人数でメニューを組んで、私たちは数学とか力学の演習をやらせています。やらせると言っても、ただ単に授業中にやらせるのではなくて、本当に前の黒板でやらせる。事細かく「ここはこうなんだ」とか、いろいろ突っ込みを入れて学生に気がつかせます。4年生のゼミでやっているようなことを1年生で行うのです。

大石 多くの学生が授業の内容が消化不良になっていないか、それはもうできないことなのか、どうしても方法論でカバーできないのであれば、達成数値を下げるしかないかとも思うのですね。

船久保 両方やっていますね。もちろん教える内容も、ここ10年ぐらいでかなり減らしたのです。減らして習っていないところがあるものだから、例えば、ほかの大学院の試験を受けたらできなかったとか、そういう話もよくあります。でも、それはやむを得ないのでですね。一応うちの大学の学科で教えている全体の最後に3年生で量子力学・統計学を学ぶのですが、そこまで行くのに最低限のものはそろえますけれども、それ以上のことはやらない。

あと問題なのは、それでもやはり勉強しない学生はどんどん落ちこぼれていくわけですね。そこでさっきお話しした強制的にやらせるシステムを特に低学年、1年生とか2年生で導入しています。やる人はほうっておいてもやるので、余り上の方の伸びはそんなに以前と変わりません。どちらかという、60点が合格ラインだとすると、大体30点から

50 点ぐらいの間の人が上に少し入っていくかなという、そういう感じですね。

遠藤 物理はちょっと特殊な世界で……。つまり学問の進展は早いだけでも、教えるのは本当に変わらないのですよね。

大石 ほとんどの分野でそうなんじゃないかなと思うのですよね。

遠藤 あとは重要な部分を絞り込んでいて、そこを確実に理解させる。特に高校前の物理と大学の物理の大きな違いがあるとすれば、単に公式を丸暗記するのではなくて理解しようと。もし公式を忘れたら自分で導き出せるぐらい理解しておけということです。しかし、そこを授業でどう講義するかというのは難しい。

大石 今言われた、「大学はこれまでと勉強の仕方が違うのだ」とかということのを植えつけるような、何か新入生に対して何かある程度プログラムのしないといけないのでしょうか。

遠藤 ちょっと私は考え方が違って、やっていることは同じかもしれないけれども、LMS とか使って課題を与える、強制的に勉強させるというのは、やっぱりいかに公式を使うかということだというふうな考え方がある。しかし、公式でも意味を考え、理解するという段階に入ろうと思うと、それでは無理がある。公式そのものに対して興味を持つことがないと、そこにまで進んでいかない。私は選択科目を持っているのですが、最低限これだけは身につけなさいというものもありますけれども、むしろ興味をどうやってかきたてていくかです。この公式にはこんなおもしろい現象があるとか、この公式で法則をここまで拡張したら、こんな不思議な現象が予見されるだとか、そういう興味・関心をやっぱり学部段階で刺激していかないと、そういう段階だと思えます。

大石 具体的な現象をたくさん提示していく。

遠藤 公式だけに流れるとおもしろくないですよ。はっきり言うと、学部段階では全くおもしろくないです。そのおもしろくないやつを乗り越えないと、修士以上のおもしろい研究テーマに結びつかない。学部の4年間、基礎練習ばかり解けといたら、やっぱり耐えられないものがあるので、修士のようなおもしろいものをどうやって低学年で取り入れるかというのが一つの課題であります。

大石 授業的に分けた方がいいとお考えですか。そういう提示することばかりする授業とか……。

遠藤 いや、分けておもしろいことばかりを話す授業がたくさんできても、学生の方で「こんなの受けてもしょうがない」ということも出てくるでしょうし。そこはうまくバランスをとってやっていった方がいい。

酒見 医学部の PBL というのが興味を持たせるというか、自分で問題を抽出するのです。だから遠藤先生がおっしゃったように、自分で問題を抽出し自分で調べる云々というので、非常にいいシステムなのです。特にこれは欧米人には非常にいいシステムで、自分で小さいころから物事を考えるシステムに慣れている人間にはいいのですけれども、医学部の医学科の学生さんに PBL をやっていますけれども、医学科の学生でも、上 20 人ぐらいはそれに非常にマッチし勉強する。ところが PBL は下 20 人が問題となるわけです。医学部の教育方法として下 20 人を上げるにはどうすればいいかというのが課題です。上 20 人はものすごく興味を持っていろいろな課題について勉強します。とにかく一生懸命勉強するのです。ところが、下 20 人はその日暮らしでということになってしまいます。

大石 そういう学生はもう関心を持たなく

ていいから、とにかく尻を叩いて外に持っていくという。

酒見 そういうのがやっぱりいるのですよね。それはほうっておいていいという問題じゃないから、うまく尻を叩くことが今後 PBL の課題と思うのです。

大石 以前 PBL を医学部から紹介いただいたときに、すごくいいシステムだと思ったのですが、それを実施するときに医学部だったら病院で日々いろんな患者さんが来られて、いろんな症例はさまざまありますよね。だから、問題はつくりやすいからと思って。ただ、それを私たちは、例えば私は化学なのですけども、そういう分野でどういうふうに適用させていくのかなというのは悩ましいところなんです……。

酒見 難しいところがあると思いますね、確かに。医学部は割とそういう問題がつくりやすいところがあって、問題を抽出させて、それを自分で勉強させるというのは非常にいいシステムなのですけれども、そこだけしか、ある意味勉強しない。

渡 それは何年生でやっているのですか。

酒見 3年生です。3年、4年でやって、5年で病棟に行きますから。それは非常にいいシステムなのですけれども、どうしてもそれは不備があるというか、日本人になじまないところが……。

大石 今の方法だと、できるのが、よりできるようになる。

酒見 できるようになります。一生懸命、やりがいを持ってやるから。そしてプレゼンテーションなんかもやっぱり上手ですよ。ところが、勉強しない人がいるわけですよ。それを勉強させるようにするにはどうしたらいいか。

大石 探っておられるという。

酒見 そうです。だから、いろんな人の意見を聞いて、いろんな方法がありますから、医学部の中にも LMS と似たようなシステムはありますが。ただ、人手がかかりますから。うちは高崎先生がいるから何とかうまくいっています。

大石 LMS のことでいうと、基礎的な、割と反復的に学ぶことで習得できるものになりませんか。

酒見 そうです。基礎的なことです。

大石 いわゆる読み書きそろばん的なことはすごくいいのだけれども、その先の、いわゆる通常の専門の2年生、3年生に進んだときに対応できるような LMS をこれから考えていくのかという技術的な問題があるように思います。

船久保 その点は LMS では対応しきれないと思うのですね。普通に記述式の問題を出して書かせてレポートされたのと余り変わらない。LMS は割と時間が自由なことと採点しなくていいという、こちらは結果がデータとして見られるから楽なのですよ。だから、結局そこまで対応しようと思うと、相当教員が努力しないとなかなかできない。

大石 やっぱり LMS の適用範囲は基礎的な部分ですかね。

船久保 LMS でもレポートを回収したり、いろんな機能はあるのですけれども、そんなにこれを使わなくちゃいけないというほどのメリットはないと思います。

大石： 本当に基礎的な、1年生の基礎科目とかを非常に力をつけさせるには非常に有効な方法だと思う。

酒見 そういうLMSを基本にして自分で問題解決、完結する力をどうつけさせるかを本当はしないとイケないのですけれども、学生にもいろいろいますので……。

大石 LMSとかどうですか。

皆本 LMSは発展的なものは、かえって大変ですよ。フォーマットが決まっていなもののに対応するという事ですから、もともとコンピュータになじまない。フォーマットがある程度決まってテンプレートがあって、そこに合わせた記述をさせるとかというのであればいいのですけど……。

酒見 テンプレートとか、LMSはないのですか。

皆本 LMSはテンプレートを用意するようなものは大丈夫で、対応できるのですけど、そうじゃないような自由記述は……。

酒見 自由記述、そういうのはなかなかないと思いますね。いろんなことを考えて書くから。

皆本 自動採点システムも文章に関して、どこからカット・アンド・ペーストしてきたのか、インターネットにあるものをそのままコピーしてきたのかどうかを判断したり、人のレポートとどのくらい類似しているのかというようなことを判定してくれる機能は最近あるのです。そういうシステムが既にあるので、本人が考えたと思われるかどうかを判定する機能はLMSに持たせるのは可能です。

大石 自由記述の場合はですね。

皆本 そういう技術は可能なのですけど、果していいのかという問題があります。システム上はそこが限界ですね。だから、個性を伸ばすとかというのではなくて、自動的にやろうとすればテンプレートが決まっているこ

とをやらせたり、自由記述でするのであれば他人との違いを判定することしかできない。そうすると、やっぱりそれ以外のことをやるのであれば一人一人レポートを採点するのと変わらないと思います。

遠藤 逆転の発想なのだけれども、大学入門科目に今私が後半やっているのですけれども、試行錯誤してこの2~3年やってみて非常におもしろい結果が出ているなど思っているのは、学生に2カ月ぐらいかけて自分で問題をつくれと言っているのです。高校のレベルでいいから、1問でいいから問題をつくれと。学生は最初は簡単にできるだろうと思ってやるのだけど、実はものすごく苦勞するのです。たった1問つくるのに2カ月ぐらいかかるのです。考えていることを文章として表現するというのはいかに難しいか。高校レベルの物理をやっても、いかに自分が理解していなかったかということを知るので。そういう意味ではLMSを使って教育する対象として学生はいるのだけれども、例えば、学生に1問でいいからLMSの教材をつくってみると。何カ月かかってもいいから。それをやると相当自分自身反省するし、勉強になるのではないかな。

皆本 問題作成をするシステムは今、卒論である学生にやらせています。でも、できませんね。発想を逆転しないとイケない。特に選択肢をつくれな。誤答になる選択肢をつくれなのです。そのような選択肢を、例えば10択だったら9個用意しないとイケないのですが、その9個を用意するというのが、かなりつらい……。

酒見 よそのところは難しいかもしれない。僕たち、医師国家試験というのがあるから、そういうのは非常に慣れているのですよ、学生は。だから、つくれと言ったらすぐつくってきますよ。国試レベルに慣れているから。

皆本 そうか、医学部の方はそうですね。

遠藤 でも、センター試験を受けてきているから受験生としては慣れているはずなのですよね。

酒見 うちマルティプルチョイスが多いからずっとなれているのですよね。

遠藤 そうじゃなくて、例えば「てにをは」とか点と丸とか、あるいは物理でいうと、垂直と鉛直の言葉の違いとか、そういうのであれば受験生は何も意識せずに解いちゃう。だけど、問題をつくる段になってうかつに使うと私が全部指摘していきますから、学生は毎回毎回何度も書き直しをさせられる。

大石 今、遠藤先生がおっしゃった、やっぱり教員が問題をつくっていく過程で強くかわらないとだめですね。ただ問題をつくりなさいと言って、最後に出てきたものに対して見ているのではなくて、そのプロセスにどんだんかかわっていかないといけない。そうすると、ある程度少人数の授業でないとい……。

船久保 さっきから言われているように、議論する習慣がないでしょう。高校まで、全然。突き詰めていくこともあるかもしれないけれども、しれは本当にごくまれで、一般的にはそういう議論をしたりとか、そういう自分の考えを表現したり文に書いたりとかできないでしょう。

大石 あくまで授業というか、講義をただ単に受けるだけですね。

船久保 一部の授業でプレゼンやらせても、なかなかうまくできないのですよね。

酒見 そういう意味ではPBLというのは非常にうまいですよ。こういうのをまとめてきて、それをプレゼンでスライドを使って説明しろといったら、今はスライド資料をつくってきます。余り厚くするな、2枚ぐらいに収めろと言ったら、すぐつくってくるから。そ

ういうのは、学習の教育方法としてはいいのですけれどもね。

大石 ただ、多くの授業では、それはなかなかできませんね……。結局それは方法論としてはすごくいいと思うのですけれども、それをやると15週とかの中で学べる量は減らさないといけないですね。

酒見 そうです。だから15週の授業のなかでそうしているのじゃなくて、1年半か2年ぐらいかけてやっていますからね。ただそうすると、基礎的な学力がどうしても落ちてくるのですよ。だから、それを補足するにはどうしたらいいかということで、今ちょっと医学部の方は悩んでいます。

大石 ある程度の基礎的なことは各自やらせて、授業では扱わない。

酒見 極端に言えばそうなのですが、しかし、学生はしないです。

大石 それをするような方法を、ということですか。

酒見 そうです。今、方法論を問題としています。全体的な枠組みで1年、2年では基礎の委員会、3年、4年でPBLの委員会があってそれぞれそれは機能しているのですけれども、先ほど言ったPBLでは基礎的なところの学力がちょっと落ちているから、それをどうするかということが問題になっています。

大石 基礎を固めるものと体験をして刺激をするものと、そういうのをうまく混ぜてというか、両立させて全体のカリキュラムを作っていくというのが必要なのかなと思いますけれども。

もう時間がたちましたので、田代理事の方から全体的に最後にご意見とかお考えをいただければと思います。

田代 先生方の今回の受賞の理由を、先生方ご自身がどう把握されておられるかお聞きしました。そして、教育の内容をどうするか、方法論の話などを伺うことができました。留学して視野を広げるといのが現在の学生ではどうなっているかという話から入りましたが、恐らく勉強して知的な視野を広げるといのは、外国に行ったりして視野を広げるといのは、根元では多分同じものが関係しているのかなという気がします。それは興味とか好奇心とか、あるいは冒険心とか直感とか、そういうのも関係していて、何かそういう心の状態、精神的な状態、あるいは知識の部分での状態、これらをそのまま放っておくと、多分、学部として責務を果たしていけない状態になるのかなという気がします。やはり目先の目的に閉じこもらないで、留学をすとか、新しい分野の研究をしたり、勉強に取り組んでいくような、そういう意欲を持つような何らかの仕掛けが必要だろうという思いをさらに強めました。

それから、内容と方法の議論が非常に重要になっているのは、多分入ってくる学生の学力が一つのきっかけになっているのかなという気もします。そうすると、最終的には、佐賀大学では内容と方法の両方をやっぱり呼応させていかないといけないと思います。学生のレベルに合わせて内容を整理するというような話が出ましたし、LMS を使っている宿題を出すとか、あるいは PBL で医学部生を指導する方法などのお話がありました。けれども、結局は学生の力を考えれば、内容と方法の両方をやはり呼応させていなくてはいけない。それができるのはやはり先生でしょうから、先生の力に最終的にはかかっているのだらうと思うのですね。それは日ごろ私も理事室その他で議論しているところですが、やっぱり FD が相当に必要だ、そういう実感がますますしました。

大石 どうもありがとうございました。今日の座談会で田代理事の話の通り、いろいろな問題点がさらに各方面、特に大学教育委員会、

高等教育開発センターでも議論されていくのでしょうかけれども、佐賀大学の教育をいかにすればいいかを、今日の座談会で出たいろんなご意見を踏まえて検討され、改善されることを望みます。

本日はどうもお忙しい中お集まりいただきましてありがとうございました。これで座談会を終わりにさせていただきます。

(終了)

訃報

平成 21 年 8 月 31 日、1 号表彰を受けた濱内繁義教授がご逝去されました。濱内教授は佐賀大学キャリアセンターの初代センター長を務められるなど、キャリア教育の創設にご尽力くださいました。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。